

宮崎学園都市
埋蔵文化財発掘調査概報

(V)

1985

宮崎県教育委員会

**宮崎学園都市
埋蔵文化財発掘調査概報**

(V)

1985

宮崎県教育委員会



今江城（仮称）

序

宮崎県教育委員会では、地域振興整備公団の委託を受けて、昭和55年度から宮崎学園都市建設予定地内に所在する遺跡の発掘調査を実施しています。

本書は、昭和59年度末に調査いたしました今江城（仮称）と昭和60年度に調査いたしました前原北遺跡の概要報告であります。

熊野の地は、「延喜式」などの記録にその名がみられ、日向においても古来より重要な地であったことは想像に難くありません。

今回の調査では、それに関連した山城や建物跡などを明らかにすることができました。さらには、弥生時代から古墳時代にかけての住居跡群も検出され、同時代の熊野原遺跡や堂地東遺跡など併せて、この時代の集落の変遷や生活様式の変化を解明するうえで貴重な資料になることと存じます。

なお、発掘調査にあたって深い御理解と御協力を賜った地域振興整備公団や調査指導の先生方に対して衷心から御礼を申し上げます。

昭和61年3月

宮崎県教育委員会

教 育 長 船 木 哲

例 言

1. 本書は、地域振興整備公団宮崎学園都市開発事務所の委託を受けて、県教育委員会が実施した宮崎学園都市建設予定地内に所在する遺跡群の昭和60年度の発掘調査概要報告書であるが、昭和59年度は概報を刊行しなかったため、山城調査についてをあわせて報告する。
2. 各遺跡の調査期間、調査担当者は次の通りである。

今江城跡（仮称）	昭和59年10月9日～昭和60年3月20日
	調査担当者 谷口武範
前原北遺跡（20号地）	昭和60年4月3日～昭和61年1月31日
	調査担当者 北郷泰道・谷口武範
3. 本書の執筆、及び編集には北郷と谷口が当たった。また、文頁については、文末に明記している。

本文目次

前原北遺跡

I 遺跡の位置と環境	3
II 調査の経緯と経過	3
III 調査の概要	3
IV まとめ	18

今江城跡（仮称）

I 位置と環境	21
II 遺構・遺物の概要	21
III まとめ	34

挿図目次

第1図 学園都市遺跡群位置図	
第2図 前原北遺跡遺構分布図	1~2
第3図 SA14竪穴住居跡実測図	4
第4図 SA14出土土器実測図	5
第5図 SA32竪穴住居跡実測図	6
第6図 SA32出土土器実測図	7
第7図 SA5・6竪穴住居跡実測図	8
第8図 SA6出土土器実測図	9
第9図 SA5出土土器実測図	10
第10図 SC12貯蔵穴実測図	10

第11図	SA10・SA10-1 竪穴住居跡実測図	11
第12図	SA10・SA10-SC1 出土土器実測図	12
第13図	SA16竪穴住居跡実測図	13
第14図	SA16出土土器実測図	14
第15図	SA28竪穴住居跡実測図	15
第16図	SA28出土土器実測図	15
第17図	SA15竪穴住居跡実測図	16
第18図	SA15出土土器実測図	17
第19図	前原北遺跡出土刻目突帯文土器実測図	18
第20図	周辺遺跡位置図	22
第21図	今江城遺構配置図	23~24
第22図	第7トレンチ西壁土層断面図	26
第23図	第3トレンチ東壁土層断面図	27~28
第24図	第1曲輪出土遺物実測図	31
第25図	第2曲輪遺構配置図	32
第26図	第9トレンチ東壁土層断面図	33
第27図	第2曲輪出土遺物実測図	35
第28図	第6トレンチ南壁土層断面図	36

図 版 目 次

口絵カラー 今江城（仮称）

図版1 今江城（仮称）・前原北遺跡

図版2 上, SA5・6 検出状況（北西から） 下, SA50 検出状況（西から）

図版3 上, 東端区の状態（西から） 下, SA10・SA10-1 検出状況（南東から）

図版4 上, SA10 検出状況（東から） 下, SA22 検出状況（北から）

図版5 上, SA4・SA4-1 検出状況（東から） 下, SA36 検出状況

- 図版6 上, SA49遺物出土状況 下, 高環出土状態
- 図版7 上, SC12検出状況 下, SC16検出状況
- 図版8 上, SC13検出状況 下, SC13遺物出土状態
- 図版9 上, SA30-SC1遺物出土状態 下, SA30-SC1貝殻出土状態
- 図版10 上, 西区掘立柱建物跡検出状況① 下, 西区掘立柱建物跡検出状況②
- 図版11 前原北遺跡出土遺物①
- 図版12 前原北遺跡出土遺物②
- 図版13 前原北遺跡出土遺物③
- 図版14 上, 今江城(仮称)北から 下, 今江城(仮称)遠景北西から
- 図版15 上, 第1曲輪、第3トレンチ東壁土層断面図 下, 井戸検出状況
- 図版16 上, 5号・6号土壇検出状況 下, 7号土壇検出状況
- 図版17 上, 9号土壇検出状況 下, 9号土壇遺物出土状況
- 図版18 上, 第2曲輪、作業風景(南より) 下, 第4トレンチ北壁土層断面
- 図版19 上, 遺物出土状態① 下, 遺物出土状態②
- 図版20 上, 築石検出状況 下, 第1曲輪、南側下方の平坦面
- 図版21 上, 第6トレンチ南壁土層断面
- 図版22 今江城(仮称)出土遺物

表 目 次

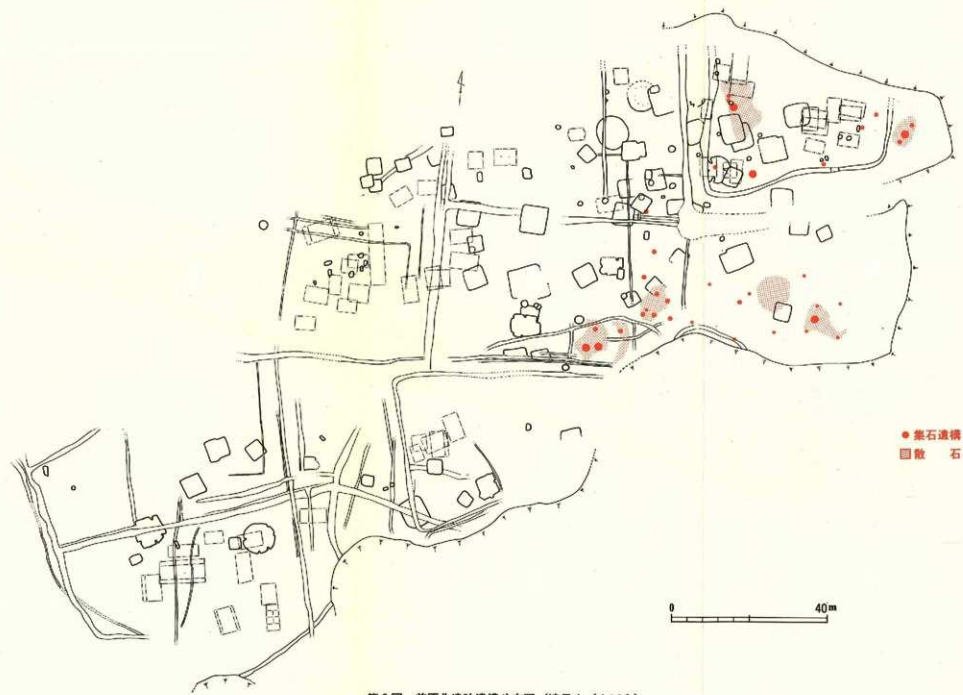
表1 SA14土器観察表	5	表6 SA16土器観察表	14
表2 SA32土器観察表	7	表7 SA28土器観察表	16
表3 SA6土器観察表	9	表8 SA15土器観察表	17
表4 SA5土器観察表	10	表9 土師器観察表①	30
表5 SA10土器観察表	12	表10 土師器観察表②	34

- 1 山内石塔群 (23号地)
- 2 下田畑遺跡 (1号地)
- 3 赤坂遺跡 (7号地)
- 4 小山尻西石塔群 (8号地)
- 5 浦田遺跡 (4号地)
- 6 入科遺跡 (5号地)
- 7 小山尻東遺跡 (2号地)
- 8 田上遺跡 (3号地)
- 9 堂地西遺跡 (9号地)
- 10 平畑遺跡 (10号地)
- 11 堂地東遺跡 (11号地)
- 12 熊野原遺跡 (14号地)
- 13 犬馬場遺跡 (13号地)
- 14 前原西遺跡 (15・16号地)
- 15 前原北遺跡 (20号地)
- 16 前原南遺跡 (19号地)
- 17 陣ノ内遺跡 (18号地)
- 18 車坂城跡
- 19 木花遺跡 (21号地)
- 20 今江城 (仮称) 跡



第1図 学園都市遺跡群位置図

前 原 北 遺 跡



第2圖 前原北遺跡遺構分布圖 (縮尺1/1,000)

I、遺跡の位置と環境

前原北遺跡は、宮崎市から清武町にまたがる宮崎学園都市建設予定地の東端、宮崎市大字熊野に位置する。舌状に東に突き出した標高11~13mの台地形を占地し、西側が平坦に削平されることによって本来の遺跡を構成する広がりやを確定し難いもの、おおよそ30,000㎡に及び遺構の分布が確認され、そのすべてを完掘することが出来た。なお、西側の削平面はほぼ平坦なレベルでシラス層にまで及ぶもので、かなり急な山地形であったと考えられ、集落跡としては完結した範囲を発掘し得たと理解してよいと思う。

II、調査の経緯と経過

前原北遺跡は、昭和56年度にそのうちの5,000㎡が20号地遺跡として調査されている⁽¹⁾。さらに、同年の試掘調査における確認によっても一大住居跡群であることが知られていた。しかし、開発の進展に伴いタバコ作付けを本調査までの間余儀なくされ、ある所においてはたとえ20cm遺存した遺構が半分の10cmに削平されているなど耕作による遺跡破壊が進み、あらためて耕作と遺構の保全に問題を残した。

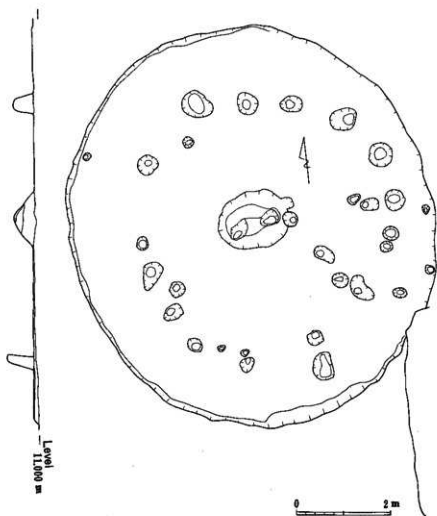
発掘調査には4月3日から着手し、まず重機で耕土を除去し、その後遺構検出にとりかかった。すでにアカホヤ層下に集石遺構が存在する事が知られていたため、アカホヤ層上に遺構の確認されなかった場所は集石遺構の検出に心がけた。また調査の過程では掘立柱建物跡の復元を行い、遺跡説明会を開催した。

III、調査の概要

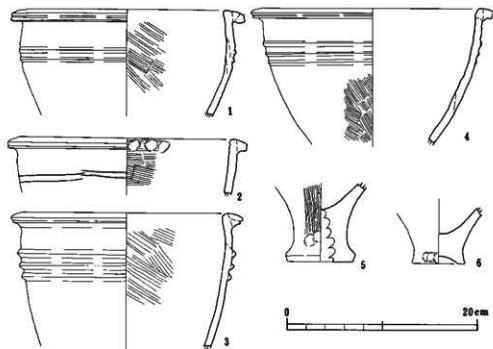
検出された遺構と遺物は多種にわたる。縄文早期の集石遺構と早期土器群、縄文晩期系土器、弥生時代の各期の竪穴住居跡と貯蔵穴、それに伴う弥生土器群、古墳時代の竪穴住居跡と土師器、須恵器、さらに掘立柱建物跡と陶磁器、そして近世墓などである。

縄文時代

36基の集石遺構と約1,000㎡におよぶ散石が認められた(第2図)。集石遺構は主に遺跡の東端に集中してあり、中でも台地形の縁辺りにおおむね分布し、散石はそれらの内側に広がる傾向をみせる。そうした石のほとんどは、肉眼観察においては加火されている⁽²⁾。その中で注目を引いたのは、南辺りに検出された東西に並ぶ4基の集石遺構で、それぞれに集石の形状に差が認められる。それらは連続して形成されたものと見ることも出来るし、



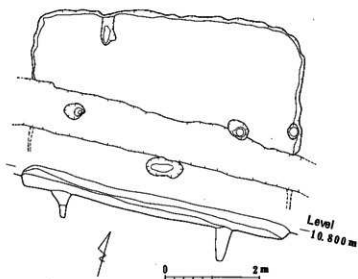
第3圖 SA14墜穴住居跡実測圖 (縮尺1/40)



第4図 SA14出土土器実測図(縮尺1/4)

表1 SA14土器観察表

図 番 号	遺構名	遺物 番号	器種	調 整		焼成	色 調		胎 土	備 考
				外 面	内 面		外 面	内 面		
第4図	SA14	1	甕	ハケ目の チナデ	粗いハケ目	良好	浅黄褐色 7.5YR8/4	浅黄褐色 7.5YR8/4	1mm大の砂粒を 含む	スス付着
・	・	2	甕	ナデ	粗いハケ目	良好	灰 5YR7/4	灰 7.5YR7/3	1~2mmの砂粒 を含む	沈澱文
・	・	3	甕	ナデ	粗いハケ目	良好	灰 5YR7/6	灰 5YR7/6	1mm大の砂粒を 含む	
・	・	4	甕	ナデ、ハケ目 のチナデ		良好	灰 5YR7/6	灰 7.5YR7/4	1mm大の砂粒を 含む	
・	・	5	甕・ 底形	ヘラ磨き、 ナデ	ナデ	良好	灰 7.5YR7/4	灰 7.5YR7/4	1mm大の砂粒を 含む	
・	・	6	甕・ 底形	ナデ	ナデ	良好	灰 5YR7/4	灰 7.5YR7/3	1mm大の砂粒を 含む	



第5図 SA32竪穴住居跡実測図(縮尺1/40)

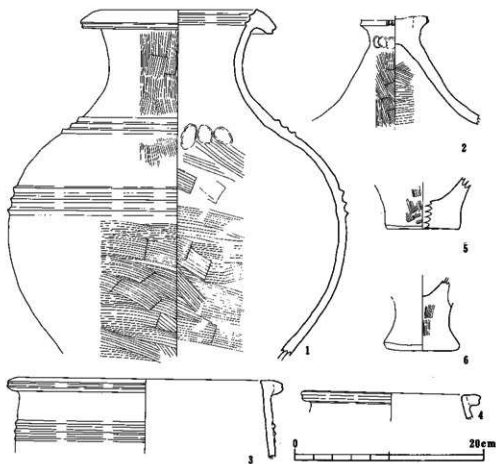
機能問題についてはしばらく保留しておくとしても、集石の形成そして廃絶の過程の各段階を示すものようにも見る事が出来る。

一方、検出された縄文土器は極めて少量であるが、押型文・塞ノ神式・前平式・吉田式土器などがある。また、石器類もそれほど多くないが打製石鏃に頁岩製の尖頭器などがある。

弥生時代

検出された竪穴住居跡は、遺構の輪郭の不明なものも含め、76基を数えている。まだ詳細な遺物の検討が済んでいないため、弥生時代の竪穴住居跡と古墳時代の竪穴住居跡との実数は明らかにし難い。弥生時代の住居跡での確実な上限は、中期までであるが、遺物としては夜日式系の土器片(第19図)が確認されており、学園都市遺跡群全体のなかでの弥生文化の成立について極めて重要かつ示唆的なものである。

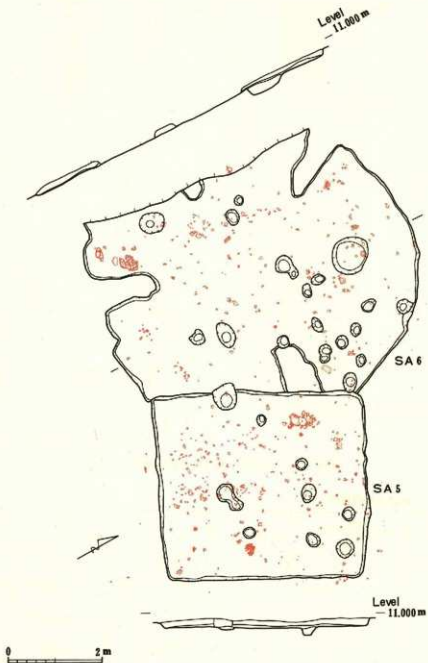
SA13・SA14(第3図)は直径8m前後の円形住居跡で、学園都市遺跡群の弥生住居跡⁽³⁾のなかでは、最も古く遡らせる事ができるものである。また、県内では新宮町新田原遺跡⁽³⁾で検出された住居跡と共に、典型を示す円形住居跡に数えることができる。住居のほぼ中心に長径1.5mの掘り込みがあり、さらにその中に2本の支柱穴があり、壁寄りに8本の柱穴が巡る。出土する弥生土器は、口縁帯に突帯を張り巡らすもので、胴部への施文は沈線文ある



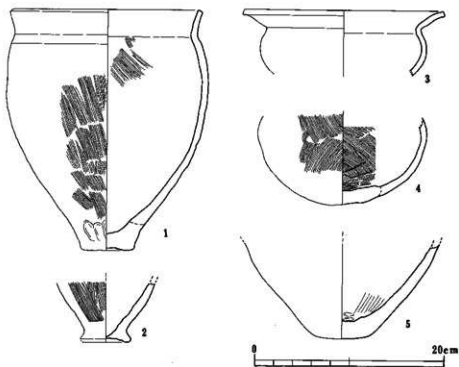
第6図 SA32出土土器実測図 (縮尺1/4)

表2 SA32土器観察表

図面 番号	遺構名	遺物 番号	調 整		焼成	色 調		胎 土	備 考	
			外 面	内 面		外 面	内 面			
第6図	SA32	1	葉 ハケ目の上 をへら磨き	ハケ目	良好	にふい煙 7.5 YR 7/4 黒曜(10 YR 8/1)	にふい煙 7.5 YR 7/3	1~2mm大の砂 を含む		
"	"	2	高脚杯	ハケ目	やや 不良	浅黄橙 10 YR 8/4	浅黄橙 10 YR 8/3	1mm大の砂粒を 多く含む	断面突起 あり	
"	"	3	葉	ナデ	良好	にふい煙 7.5 YR 7/3	にふい煙 7.5 YR 7/3	1~3mm大の石 砂粒を含む		
"	"	4	葉	ナデ	良好	浅黄橙 7.5 YR 8/4	にふい煙 5 YR 7/4	1~2mm大の砂 粒を含む		
"	"	5	葉・ 底部	ハケ目	ナデ	良好	浅黄橙 7.5 YR 8/3	明褐色 7.5 YR 7/1	1~2mm大の砂 粒を含む	
"	"	6	葉・ 底部	ハケ目	ナデ	良好	浅黄橙 10 YR 8/3	浅黄橙 10 YR 8/3	1~2mm大の砂 粒を含む	



第7圖 SA 5・6 竪穴住居跡実測圖 (縮尺 1/40)



第8図 SA6出土土器実測図(縮尺1/4)

表3 SA6土器観察表

図面 番号	遺物 番号	器種	調 整		焼成	色 調		胎 土	備 考
			外 面	内 面		外 面	内 面		
第8図	SA6	1 壺	ハケ目	ハケ目	良好	にぶい黄 7.5 YR 7/4	にぶい黄橙～ 10 YR 7/3 褐灰色00 YR 4/1	1～5mm大の石 砂粒を含む	スズ付輪
"	"	2 腹底 部	ハケ目	ナデ	良好	橙 5 YR 7/6	橙 7.5 YR 7/6	1～4mm大の石 砂粒を含む	
"	"	3	ナデ	ナデ	良好	浅黄橙 7.5 YR 8/6	浅黄橙 7.5 YR 8/6	細砂粒を含む	
"	"	4 壺	ハケ目	ハケ目、 ナデ	良好	浅黄橙 10 YR 8/3	褐灰色 10 YR 4/1	1～3mm大の砂 を含む	
"	"	5 腹底 部	ハケ目のあ とナデ		良好	にぶい黄 7.5 YR 7/4	浅黄橙 10 YR 8/3	1～3mm大の砂 粒を含む	



第9図 SA5出土土器実測図 (縮尺 1/4)

表4 SA5土器観察表

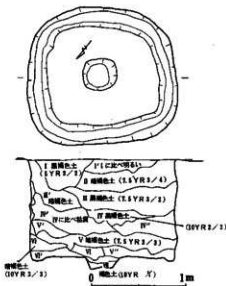
図 番 号	遺構名	遺物 番号	器種	調 整		焼成	色 調		胎 土	備 考
				外 面	内 面		外 面	内 面		
第9図	SA5	1	壺	ナデ	ナデ	良好	にふい煙 7.5YR7/4	にふい煙 7.5YR7/4	1mm~2mm次の 石粒を含む	スス付着
"	"	2	高坏	ハケ目、 ナデ	ハケ目、 ナデ	やや 不良	横黄煙 7.5YR8/4	横黄煙 7.5YR8/4	砂質、石英砂を 含む	
"	"	3	坏身	ヘラ磨き	ヘラ磨き	良好	煙 2.5YR6/6	煙 5YR7/6	石英砂を含む	丹塗り (?)

いは突帯文を施す甕形土器が中心である(第4図)。

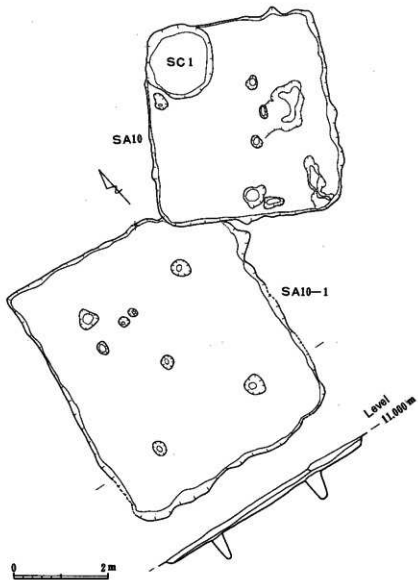
しかし、ほぼ同時期これら円形住居跡のほか
に方形住居跡も存在しており、平面プランの違いが
示され問題は複雑である。SA32(第5図)は全
体形が不明であるが、特徴的には壺形土器(第6
図1)が良好に床面に遺存していた。

これら中期の住居跡の後、現段階での整理では
厳密を期し難いが、しばらくの空白があり、後期
の間仕切り住居の時代を迎える。SA6(第7図)

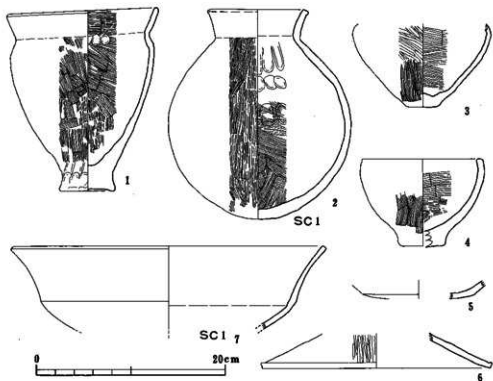
・SA50・SA53などが代表であるが、全体の中
に占める割合は多くはない。このことは、熊野原
遺跡⁽⁴⁾・堂地東遺跡⁽⁵⁾などと比べ留意する必要がある
問題である。



第10図 SC12貯蔵穴実測図 (縮尺 1/40)



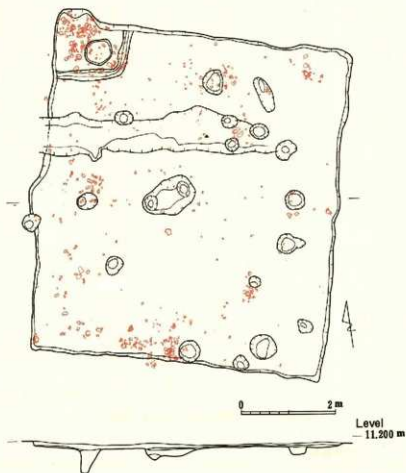
第11圖 SA10・SA10-1 堅穴住居跡実測圖 (縮尺1/40)



第12図 SA10・SA10-SC1出土土器実測図(縮尺1/4)

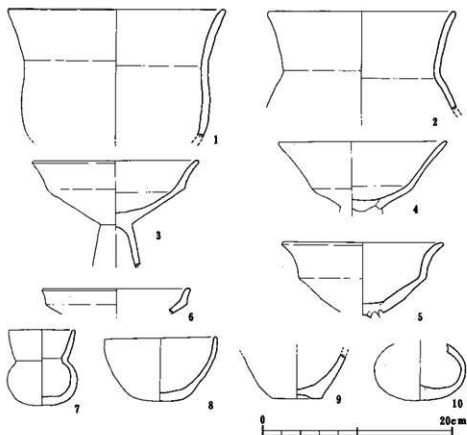
表5 SA10土器観察表

図面 番号	遺構名	遺物 番号	器種	調 整		焼成	色 調		胎 土	備 考
				外 面	内 面		外 面	内 面		
第12図	SA10	1	甕	ハケ目	ハケ目	良好	浅黄橙 7.5 YR 8/6	橙 5 YR 7/8	2~3mm大の砂 粒を含む	スス付着
"	"	SC1	甕	ハケ目	ハケ目	良好	橙 5 YR 7/6	浅黄橙 7.5 YR 8/6	1~3mm大の砂 粒を含む	丸底
"	SA10	3	甗	ヘラ磨き、 ハケ目	ハケ目	良好	浅黄橙 7.5 YR 8/4	にぶい黄橙 10 YR 6/3	1~2mm大の砂 粒を含む	
"	"	4	鉢	ハケ目	ハケ目	良好	浅黄橙 10 YR 8/4	浅黄橙 10 YR 8/4	1~3mm大の砂 粒を含む	
"	"	5	高环 肩部	ハケ目のあ とナデ	ハケ目のあ とナデ	良好	にぶい橙 7.5 YR 7/4	浅黄橙 10 YR 8/3	0.5~1mmの粗 砂粒を含む	
"	"	5	高环 脚部	ヘラ磨き		良好	橙 2.5 YR 7/6	橙 5 YR 7/6	0.5~1mmの粗 砂粒を含む	
"	"	SC1	高环	ヘラ磨き (風化著しい)	ナデ	良好	浅黄橙 7.5 YR 8/6	浅黄橙 7.5 YR 8/6	1mm大の砂粒を 含む	



第13図 SA 16 竪穴住居跡実測図 (縮尺 1/40)

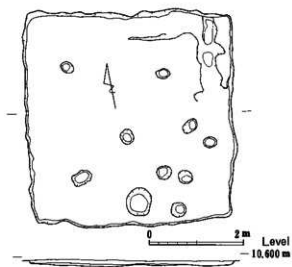
こうした住居跡のほかにも本遺跡で注目されるものは、ことに遺跡の北東の区域に集中してみられる貯蔵穴である。円形に限りなく近い隅丸のプランと床面中央に柱穴をもつSC 12 (第10図) などはその最も特徴的なものである。また、貯蔵穴が住居内に設けられたと見られる例 (第11図) もあり、これまでの他の学園都市遺跡群のなかでは検出されることのなかった貯蔵穴の存在は貴重である。



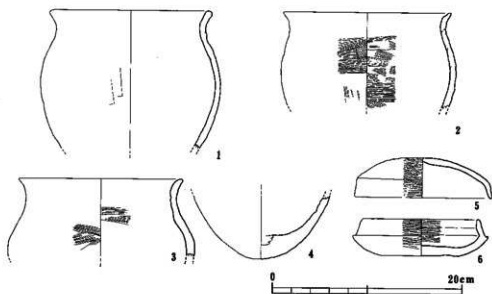
第14図 SA16出土土器実測図(縮尺1/4)

表6 SA16土器観察表

図 番 号	遺構名	遺物 番号	器種	調 整		焼成	色 調		胎 土	備 考
				外 面	内 面		外 面	内 面		
第14図	SA15	1	壺	ナデ	ナデ	良好	橙 7.5YR6/8	橙 7.5YR7/6	0.5~2mm大の 石砂粒を含む	スス付着
"	"	2	甕	ナデ	ナデ	良好	橙 7.5YR7/4	橙 7.5YR7/4	0.1~3mm大の 石砂粒を含む	スス付着
"	"	3	高杯	ナデ	ナデ	良好	灰白 5YR7/4	淡黄橙 7.5YR6/4	0.5~2mm大の 砂粒を含む	
"	"	4	高杯	ナデ	ナデ	良好	橙 5YR7/8	5YR7/8	0.5mm大の細砂 粒を含む	
"	"	5	高杯	ナデ	ナデ	良好	淡黄橙 10YR8/3	灰白 10YR8/2	1mm大の砂粒を 含む	スス付着
"	"	6	ナデ	ナデ	ナデ	良好	淡黄橙 7.5YR8/4	淡黄橙 7.5YR8/4	細砂粒を含む	
"	"	7	小型 丸底甕	ナデ	ナデ	良好	橙 5YR7/6	橙 5.5YR6/8	1mm大の砂粒を 含む	
"	"	8	甕	ナデ	ナデ	良好	橙 2.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	細砂粒を含む	
"	"	9	甕部	ハナ目のあ とナデ	ナデ	良好	橙 5YR7/6	淡黄橙 7.5YR8/6	0.5~2mm大の 砂粒を含む	
"	"	10	丸底甕	ナデ	ナデ	良好	黄灰 2.5Y4/1	淡黄橙 7.5YR8/6	1mm大の砂粒を 含む	



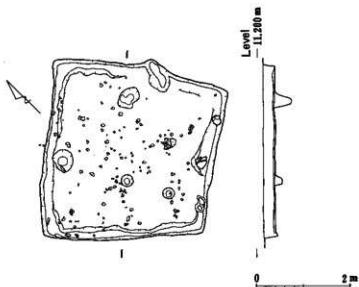
第15圖 SA 28整穴住居跡実測圖 (縮尺 1/40)



第16圖 SA 28出土土器実測圖 (縮尺 1/4)

表7 SA28土器観察表

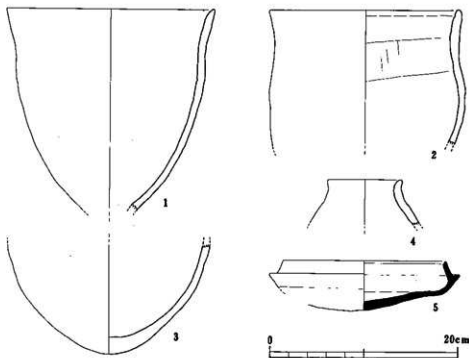
図面 番号	遺構名	遺物 番号	器種	調 整		焼成	色 調		胎 土	備 考
				外 面	内 面		外 面	内 面		
第16図	SA28	1	甕	ナデ	ナデ	良好	橙 7.5YR 7/6	橙 5YR 6/8	3~5mm大の石 砂粒を多く含む	1と4は 同一器体
"	"	2	甕	ハケ目	ハケ目	良好	比色い橙 7.5YR 7/4	灰黄褐 10YR 4/2	3~5mm大の石 砂粒を多く含む	スス付着
"	"	3	甕	ハケ目のあ とナデ	ハケ目	良好	浅黄橙 7.5YR 6/4	浅黄橙 7.5YR 6/4	1~3mm大の石 砂粒を多く含む	
"	"	4	甕・ 底部	ナデ	ナデ	良好	橙 7.5YR 7/6	橙 5YR 6/8	3~5mm大の石 砂粒を多く含む	
"	"	5	坏蓋	ヘラ磨き	ナデ	良好	橙 5YR 7/6	橙 5YR 7/6	1~2mmの砂粒 を含む	
"	"	6	坏身	ヘラ磨き	ヘラ磨き	良好	橙 5YR 6/6	橙 5YR 7/8	1~2mmの砂粒 を含む	



第17図 SA15竪穴住居跡実測図 (縮尺1/40)

表 8 SA15土器観察表

図 番 号	遺構名	遺物 番号	附属	装 飾		焼成	色 調		胎 土	備 考
				外 面	内 面		外 面	内 面		
第17回	SA15	1	甕	ナゲ、削リ	ナゲ	良好	黄 5YR7/8	黄灰 2.5Y7/2	1~3mm大の砂 粒を多く含む	スス付着
"	"	2	甕	ナゲ	ナゲ	良好	浅黄橙 10YR8/4	黄灰 2.5Y6/1	細砂粒、1~3 mm大の砂粒を多 く含む	
"	"	3	甕・ 瓦部	ナゲ	ナゲ	良好	にぶい黄 7.5YR7/4	黄灰 2.5Y4/1	1~3mm大の砂 粒及び4~6mm 大の石砂粒	スス付着
"	"	4	甕	ナゲ、磨き	ナゲ、磨き	良好	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 2.5Y6/2	1mm大の砂粒	
"	"	5	須恵瓦 坏身	ナゲ	同心円文印 き	良好	灰白 2.5Y7/1	灰白 2.5Y7/1	1~3mm大の砂 粒を含む	



第18図 SA15出土土器実測図 (縮尺1/4)

古墳時代

小型丸底壺(第14図7)から6世紀代の須恵器(第18図5)までを掘出し、古墳時代とすることができる。ここでは円形のプランはみられずすべて方形住居跡である。SA5(第7図)・SA15(第17図)などの一辺4m前後のやや小型の住居跡とSA16のように大きめの住居跡とがある。

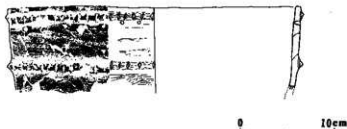
古代以降

検出された掘立柱建物跡はおおよそ50棟分を数える。分布の場所は、北東の区域、中央の区域、そして南西の区域に集中する。さらにそれらは、溝によって区画され、明瞭な在り方としては北東の区域に見ることができ、溝の南辺に陸橋部を設け、その中に掘立柱建物を配する。詳細には出土遺物の検討に待たねばならないが、56年の成果によれば13世紀を中心とし近世に至るものとみられる。また、これらの遺構は東に所在する今江城(仮称)との関連も考えられるものである。

さらに、近世墓がただ2基だけ検出され、そのうちの1基からは盃と銅銭さらに棺材とみられる木片と銅片が遺存度の悪い人骨とともに出土している。

IV、ま と め

8箇月余におよぶ調査期間は、30,000㎡という遺跡面積にたいして決して十分なものではない。むしろ、無謀な期間といえる。それ故旧石器時代の追及等に問題を残しているとはいえ、幸か不幸か耕土を除去すれば遺構面が露出するという遺跡の遺存状態がまがりなりにも調査の遂行を可能にしたといえる。



第19図 前原北遺跡出土刻目突帯文土器実測図(縮尺1/4)

地形的な制約からも、調査で把握しえた範囲は集落の自己完結した範囲と理解する事ができる。弥生時代の各期の集落を想定するとき、かつて都城市祝吉遺跡で指摘したように同時期⁽⁶⁾において円形と方形の住居跡が存在する可能性がまた指摘できる。少なくとも、近接した時期幅のなかに単一の住居形態のみが存在するのではない事だけは確実である。

さらに、掘立柱建物の溝に区画された単位を割りだすことも本遺跡の成果で可能に成った。しかし、それは遺物の検討に肉付けされ、変遷過程も含めより立体的になるであろう。

(北 郷 泰 道)

注

- (1) 宮崎県教育委員会『宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報』(Ⅱ)、1981年
- (2) 市川米太氏への熱ルミネッセンス分析の依頼に際し、実験的に肉眼観察により加火されているか否かを意識的にサンプリングした結果、肉眼観察についてはかなりの信頼度をおくことが出来るようである。
- (3) 報告書は今春刊行の予定であるが、新富町教育委員会の御好意で資料を実見させていただいた。なお、住居跡そのものは拡張及び間仕切り住居とも関連するものである。
- (4) 宮崎県教育委員会『宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報』(Ⅱ)～(Ⅳ)、1981～1983年
- (5) 宮崎県教育委員会『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第2集、1985年
- (6) 都城市教育委員会『祝吉遺跡』1981年

今 江 城 跡 (仮称)

I 位置と環境 (第20図)

熊野の地は、古来、「延喜式」の教麻駅に比定され、「建久図田帳」⁽¹⁾においても限野の名がみえ、日向においても重要な地であったことが窺える。熊野は国富荘の1つで、中世になり限野を熊野氏、加江田を岡富氏に分領されている。以後、所領争いの拡大に伴いこの地でも、山東に進出しようとする島津氏と賦肥を得ようとする伊東氏との攻防の場となっていくのである。その重要性を裏付けるがごとく付近には清武城、車坂城、曾井城、紫波洲崎城などがみられる。

当山城は、文献等にそれに匹敵する名が見られず、字名をとって「今江城」とした。

今江城は学園都市遺跡群の東端の標高約37mのところであり、清武川に面している。なお、今江城が占地する丘陵の先端部には諏訪神社が建立されている。遺跡群の中には今江城と車坂城が存在し、車坂城は今江城とは約300m離れ、加江田川に面している。また、同時期の遺跡としては前原北遺跡⁽²⁾、前原西遺跡⁽³⁾、堂地東遺跡⁽⁴⁾、山内石塔群がある。

II 遺構・遺物の概要

(1) 今江城の概要 (第21図)

今江城は、南東側はすでに土取りによって削平されており、3つあるいは北側に舌状に延びた平坦面を曲輪とすれば $4 + \alpha$ の曲輪があったと考えられる。そのなかで最も標高が高い南端に位置する曲輪が主郭と想定される(第1曲輪)。土塁は東側と南西部分に現存し、そのほかの曲輪縁辺部にも若干の高まりが見られることなどから周囲に土塁が巡らされていた可能性がある。第2曲輪は、第1曲輪の北東に位置し約5m離れている。土塁は南側に一部残存しているだけであった。第2曲輪の北側の下方に2重に巡らされた土塁がみられ、上方の土塁は第3曲輪の南側まで延びている。第3曲輪は、第1曲輪の東、第2曲輪の南に位置する。曲輪の南側はすでに土取りによって消失しており、その規模や遺構については不明である。第3曲輪の東側も消滅しているため曲輪の有無は明らかでないが、城のなかで最も弱い箇所である北東部の防御を考えると、そこには何らかの施設が設けられていた可能性がある。

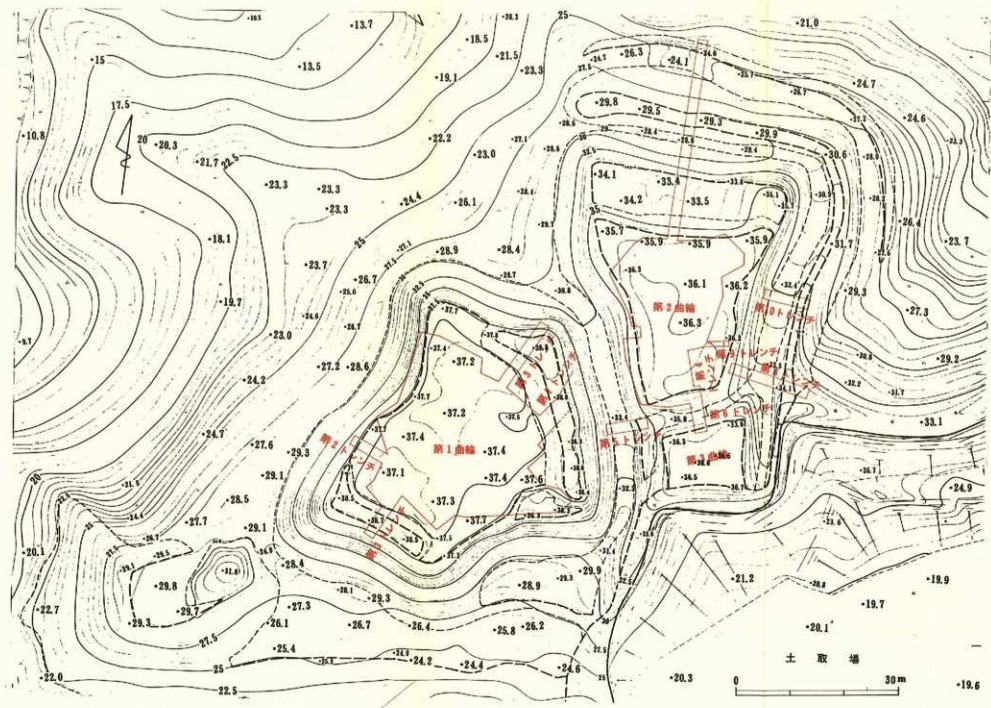
堀は曲輪の周囲をめぐり、各曲輪がそれぞれ独立した様相を呈している。深さ約2mを測り、葉研掘りである。

曲輪内の遺構では、柱穴や土壇等を主に検出した。第1曲輪では井戸1基、第2曲輪では2間×3間で東西に庇をもつ建物跡1棟が確認され、当時の城内での生活を考えるうえで貴



1. 今江城 2. 草坂城 3. 前原西遺跡 4. 福長院跡 5. 今福寺跡 6. 山の城跡 7. 古城跡 8. 曾井城跡 9. 松崎寺跡 10. 観音寺跡 11. 中山寺跡 12. 清武城跡 13. 古城跡 14. 玄松院跡 15. 蓮徳寺跡 16. 安楽寺跡 17. 文永寺跡 18. 長明寺跡 19. 勢田寺跡 20. 山内石塔群 21. 円南寺跡 22. 曾山寺跡 23. 紫波洲崎城

第20図 周辺遺跡位置図



第21図 今江城遺構配置図 (縮尺 1/200)

重要な成果といえる。

遺物としては、土師器の環・皿、青磁、白磁、備前焼等が出土している。しかし、清武城⁽⁵⁾や中之城跡⁽⁶⁾のように多量の染付や陶磁器が出土していないことから中心的城ではなかったとも考えられる。

また、土塁の各所にトレンチを設定したが、第1曲輪の第2、4トレンチにおいて土塁上に柱穴が確認され、防御施設としての櫓あるいは板塀があったことが想定される。そのほか、土層の堆積状態から2、3回の増改築が行われたようである。

(2) 第1曲輪

標高が約37mと曲輪のなかでは最も高く本郭として考えられる。城域では南端にあたる。

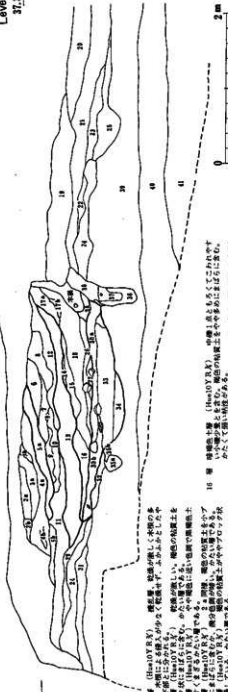
土塁は、第2曲輪と第3曲輪に面した箇所(第1土塁)と南端の部分に現存する。しかし、縁辺部にも若干の高まりがみられることから、曲輪の四周には土塁が巡らされていた可能性がある。第1土塁は、高さ約2.1m、幅約9mを測る。土層を観察すると3枚の固く締められた層が認められ、3回の増築あるいは、3回程度の補強を行って一時期に築造したとも考えられる。また、土塁の頂部より外側に下ったところに柱穴痕が認められ、櫓、あるいは板塀などの防御施設の存在が想定される(第23図)。これは、第3トレンチの土層においても認められる(第22図)。

曲輪内の平坦地は約210㎡あり、柱穴、土壌10基、井戸1基を検出した。

出土遺物では、土師器、陶磁器、弥生土器がある(第24図)。

1~8は土師器環・皿である(表9)。1~4、6はヘラ切り底、5、7、8は糸切り底⁽⁷⁾を呈す。1は体部に調整による凹凸を残し、器形から山内石塔群におけるA-I類に類似する。ヘラ切り底のものは体部と底部との境が明瞭で体部が比較的厚手である。9、10は備前焼である。口縁部上方で折り曲げられ玉縁を呈す。9は口径約32cmを測る。内外面とも赤褐色で、横ナデ調整。10は灰黄褐色をなす。11~13は青磁である。11は端反り碗で口径16.2cmを測る。オリーブ灰色の釉が施される。12も端反り碗で口径14.6cm。オリーブ灰色の施釉。釉は薄く、全体に細かい貫入がはいる。体部下半にはヘラ削りによる稜が明瞭に残る。13は盤で口縁部が稜花をなす。口縁内部にヘラ描きによる線文が施される。口径24.6cmを測る。オリーブ黄色の施釉。14は白磁で八角形をなす高台付きの小鉢である。底部と体部の境から伸びる8本の稜線は口縁部までとどかず途中で消える。見込み部には花文が施される。高台は面取りされやや上げ底気味で、露胎となる。15~18は弥生土器である。15は口縁がくの字をなしその直下に一条の刻目突帯を有する壘形土器である。外面には多量にススが付着。

Level
37.39 m



- 1 層 暗褐色土 (HaeIOY R.K.) 硬質、粘質が強く水層の多い上部土。水層による侵入が少なく乾季中、土がよこしたや
- 2 層 小アロツク状 (HaeIOY R.K.) 粘質が強い、褐色の粘質土を
- 3 層 暗褐色土 (HaeIOY R.K.) 粘質が強い、褐色の粘質土を
- 4 層 暗褐色土 (HaeIOY R.K.) 粘質が強い、褐色の粘質土を
- 5 層 暗褐色土 (HaeIOY R.K.) 粘質が強い、褐色の粘質土を
- 6 層 暗褐色土 (HaeIOY R.K.) 粘質が強い、褐色の粘質土を
- 7 層 暗褐色土 (HaeIOY R.K.) 粘質が強い、褐色の粘質土を
- 8 層 暗褐色土 (HaeIOY R.K.) 粘質が強い、褐色の粘質土を
- 9 層 暗褐色土 (HaeIOY R.K.) 粘質が強い、褐色の粘質土を
- 10 層 暗褐色土 (HaeIOY R.K.) 粘質が強い、褐色の粘質土を
- 11 層 暗褐色土 (HaeIOY R.K.) 粘質が強い、褐色の粘質土を
- 12 層 暗褐色土 (HaeIOY R.K.) 粘質が強い、褐色の粘質土を
- 13 層 暗褐色土 (HaeIOY R.K.) 粘質が強い、褐色の粘質土を
- 14 層 暗褐色土 (HaeIOY R.K.) 粘質が強い、褐色の粘質土を
- 15 層 暗褐色土 (HaeIOY R.K.) 粘質が強い、褐色の粘質土を
- 16 層 暗褐色土 (HaeIOY R.K.) 粘質が強い、褐色の粘質土を
- 17 層 暗褐色土 (HaeIOY R.K.) 粘質が強い、褐色の粘質土を
- 18 層 暗褐色土 (HaeIOY R.K.) 粘質が強い、褐色の粘質土を
- 19 層 暗褐色土 (HaeIOY R.K.) 粘質が強い、褐色の粘質土を
- 20 層 暗褐色土 (HaeIOY R.K.) 粘質が強い、褐色の粘質土を
- 21 層 暗褐色土 (HaeIOY R.K.) 粘質が強い、褐色の粘質土を
- 22 層 暗褐色土 (HaeIOY R.K.) 粘質が強い、褐色の粘質土を
- 23 層 暗褐色土 (HaeIOY R.K.) 粘質が強い、褐色の粘質土を
- 24 層 暗褐色土 (HaeIOY R.K.) 粘質が強い、褐色の粘質土を
- 25 層 暗褐色土 (HaeIOY R.K.) 粘質が強い、褐色の粘質土を
- 26 層 暗褐色土 (HaeIOY R.K.) 粘質が強い、褐色の粘質土を
- 27 層 暗褐色土 (HaeIOY R.K.) 粘質が強い、褐色の粘質土を
- 28 層 暗褐色土 (HaeIOY R.K.) 粘質が強い、褐色の粘質土を
- 29 層 暗褐色土 (HaeIOY R.K.) 粘質が強い、褐色の粘質土を
- 30 層 暗褐色土 (HaeIOY R.K.) 粘質が強い、褐色の粘質土を
- 31 層 暗褐色土 (HaeIOY R.K.) 粘質が強い、褐色の粘質土を
- 32 層 暗褐色土 (HaeIOY R.K.) 粘質が強い、褐色の粘質土を
- 33 層 暗褐色土 (HaeIOY R.K.) 粘質が強い、褐色の粘質土を
- 34 層 暗褐色土 (HaeIOY R.K.) 粘質が強い、褐色の粘質土を
- 35 層 暗褐色土 (HaeIOY R.K.) 粘質が強い、褐色の粘質土を
- 36 層 暗褐色土 (HaeIOY R.K.) 粘質が強い、褐色の粘質土を
- 37 層 暗褐色土 (HaeIOY R.K.) 粘質が強い、褐色の粘質土を
- 38 層 暗褐色土 (HaeIOY R.K.) 粘質が強い、褐色の粘質土を
- 39 層 暗褐色土 (HaeIOY R.K.) 粘質が強い、褐色の粘質土を
- 40 層 暗褐色土 (HaeIOY R.K.) 粘質が強い、褐色の粘質土を
- 41 層 暗褐色土 (HaeIOY R.K.) 粘質が強い、褐色の粘質土を

第22図 第7トレンチ西壁土層断面図 (縮尺1/60)

口径26.8cm。内面は横方向のハケ調整。胎土には0.5mm前後の砂粒を含む。色調は外面が橙色、内面が明黄褐色。焼成は良好。16は壘形土器の底部で内外面とも縦方向のハケ調整の後ナデ。胎土には1~3mm程度の砂粒を多く含む。色調は外面がにぶい橙色、内面が浅黄褐色を呈す。焼成は良好。17は複合口縁壺の口縁部である。しまりのある頸部から外湾し、拡張部が直立気味にのび口縁端部で外反する。拡張部は横ナデ、頸部はきめの細かいハケ調整。胎土には砂粒を含む。外面が浅黄褐色、内面が黄褐色をなす。焼成は良好。18は拡張部に縞描波状文をもつ複合口縁壺である。内外面とも横ナデ。胎土には1mm前後の砂粒を多量に含む。色調は内外面とも浅黄褐色。焼成は良好。

(3) 第2曲輪 (第25図)

第2曲輪は、第1曲輪の北東に位置する。形は北側に向かった台形を呈し、その直下には2条の土塁が巡っている。曲輪には第3曲輪に面した箇所にも土塁が現存している。高さ1.1m、幅6mを測る。第4トレンチを設定し土層観察を行ったところ二つの固く締められた層が認められ、第1土塁と同様な構築あるいは増築の方法が窺える。(第26図)

平坦面は約520㎡あり、柱穴、土壇、カマドなどを検出した。建物跡は1棟想定され、主軸はN-75°-Wを示す。規模は2間×3間で東西に庇を有する。桁行約7.8m、梁行約7.0mを測る。柱間では桁行約2.0m、梁行約2.2mである。曲輪のほぼ中央に位置し第2曲輪の主たる建物であったと考えられる。

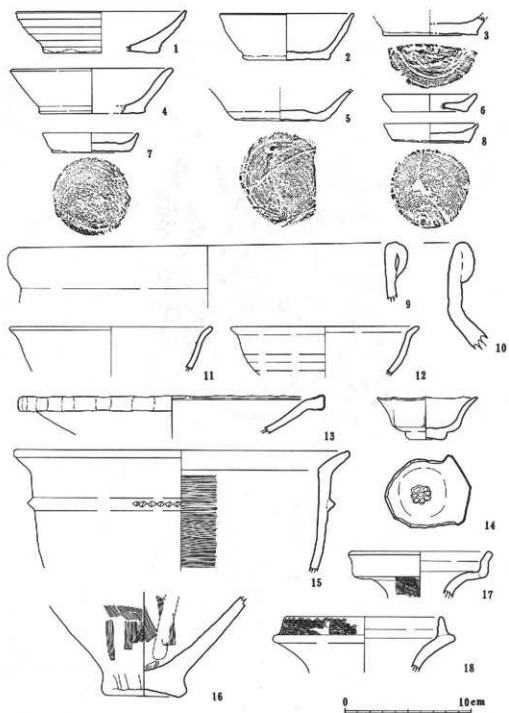
そのほかに弥生後期の住居跡3軒も検出した。

出土遺物では土師器、陶磁器、弥生土器などがある。(第27図)

19~35は土師器 杯・皿である(表10)。36~40は青磁碗である。36は端反り碗で口縁直下に4本の沈線が施される。淡オリーブの釉がかかり、細かい貫入がみられる。37は体部外面下半にヘラ削りによる稜が残る。明オリーブ灰に施釉される。38は全体にオリーブ灰色の釉が厚くかかる。39はヘラ削りのための稜がみられる。灰白色の釉がかかるが体部下半は露胎となる。40は青磁碗の底部で高台は面取りされている。明オリーブ灰色の釉がかかるが、高台手前から畳付き、高台内までは露胎となる。41、42は備前焼である。41は口縁が上方で折り曲げられ玉縁を呈す。色調は外面がにぶい赤褐色、内面が灰褐色。頸部に自然釉がかかる。42は鉢鉢の口縁部で、内外面とも横ナデ調整。内面には調整後、縦の条線が施される。色調は外面が灰黄褐色、内面がにぶい黄褐色を呈す。口唇部から内面にかけて一部自然釉がかかる。

表9 土師器観察表(1)

番号	出土位置	器形	法量(cm)			色		調		胎	土	焼成	調整		備考
			口径	底径	器高	内面	外面	内面	外面				底部		
19	第2曲輪	坏	11.5	7.2	3.5	浅黄橙	浅黄橙	浅黄橙	黑、褐色の細砂粒を含む	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	底部中央部に粘土のため	
20	"	"	11.4	8.2	3.5	浅黄橙	浅黄橙	浅黄橙	茶、白、灰色の細砂粒を含む	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り		
21	"	"	12.8	7.4	3.2	浅黄橙	浅黄橙	浅黄橙	黒、白、褐色の細砂粒を含む	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り		
22	"	"	11.0	5.8	2.8	浅黄橙	浅黄橙	浅黄橙	茶、灰色の細砂粒を含む	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り		
23	"	"	10.5	6.8	2.8	にぶい橙	にぶい橙	にぶい橙	白、黒色の細砂粒を含む	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り		
24	"	"	11.8	6.2	3.2	浅黄橙	浅黄橙	浅黄橙	0.5mm~1mm前後の黒、茶の粒を含む	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り		
25	"	"	12.0	6.8	3.2	浅黄橙	浅黄橙	浅黄橙	褐、白色の細砂粒を含む	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り	風化が著しい	
26	"	"	10.4	7.4	3.2	橙	橙	橙	茶、黒色の砂粒を含む	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り		
27	"	"	-	6.0	-	浅黄橙	浅黄橙	浅黄橙	細砂粒を含む	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り	一部赤味をおびたり、くすんでいる。	
28	"	皿	7.8	6.7	1.25	浅黄橙	浅黄橙	浅黄橙	茶、黒の細砂粒を含む	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り		
29	"	"	7.3	6.3	1.4	浅黄橙	浅黄橙	浅黄橙	白、灰、茶の細砂粒を含む	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	底部中央部に粘土のため	
30	"	"	8.0	6.2	1.6	浅黄橙	浅黄橙	浅黄橙	白、黒、褐色の細砂粒を含む	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り		
31	"	"	8.2	6.5	1.75	浅黄橙	浅黄橙	浅黄橙	0.2mm前後の砂粒を含む	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り		
32	"	"	7.3	6.7	1.7	浅黄橙	浅黄橙	浅黄橙	黒、灰色の細砂粒を含む	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り		
33	"	"	8.5	7.0	1.4	浅黄橙	浅黄橙	浅黄橙	白、黒、褐色の細砂粒を含む	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	焼きむずみあり	
34	"	"	7.8	6.0	2.1	浅黄橙	浅黄橙	浅黄橙	白、黒、褐色の細砂粒を含む	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り		
35	"	"	9.5	7.7	1.5	浅黄橙	浅黄橙	浅黄橙	黒、灰色の細砂粒を含む	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	一部に焼きムラあり	

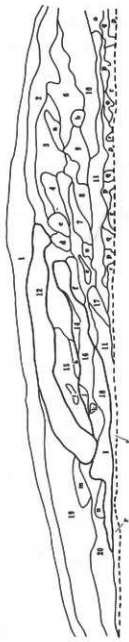


第24图 第1曲輪出土遺物実測図(縮尺1/3)



第25図 第2曲輪遺構配置図(縮尺1/100)

Level
37,300 m



1. 草壁土層の侵入土層は少ない。
2. 草壁土層の侵入土層は多い。
3. 草壁土層の侵入土層は多い。
4. 草壁土層の侵入土層は多い。
5. 草壁土層の侵入土層は多い。
6. 草壁土層の侵入土層は多い。
7. 草壁土層の侵入土層は多い。
8. 草壁土層の侵入土層は多い。
9. 草壁土層の侵入土層は多い。
10. 草壁土層の侵入土層は多い。
11. 草壁土層の侵入土層は多い。
12. 草壁土層の侵入土層は多い。
13. 草壁土層の侵入土層は多い。
14. 草壁土層の侵入土層は多い。
15. 草壁土層の侵入土層は多い。
16. 草壁土層の侵入土層は多い。
17. 草壁土層の侵入土層は多い。
18. 草壁土層の侵入土層は多い。
19. 草壁土層の侵入土層は多い。
20. 草壁土層の侵入土層は多い。

- a. 草壁土層の侵入土層は多い。
- b. 草壁土層の侵入土層は多い。
- c. 草壁土層の侵入土層は多い。
- d. 草壁土層の侵入土層は多い。
- e. 草壁土層の侵入土層は多い。
- f. 草壁土層の侵入土層は多い。
- g. 草壁土層の侵入土層は多い。
- h. 草壁土層の侵入土層は多い。
- i. 草壁土層の侵入土層は多い。
- j. 草壁土層の侵入土層は多い。
- k. 草壁土層の侵入土層は多い。
- l. 草壁土層の侵入土層は多い。
- m. 草壁土層の侵入土層は多い。
- n. 草壁土層の侵入土層は多い。
- o. 草壁土層の侵入土層は多い。
- p. 草壁土層の侵入土層は多い。
- q. 草壁土層の侵入土層は多い。
- r. 草壁土層の侵入土層は多い。



第26図 第9トレンチ草壁土層断面図 (縮尺1/40)

(4) その他の遺構

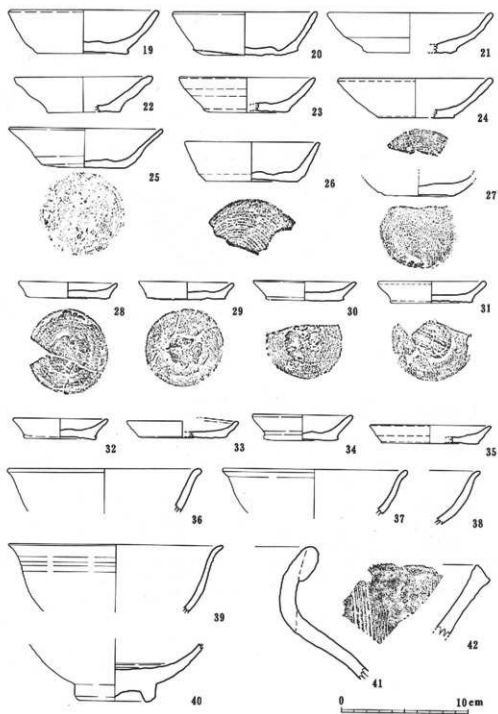
第2曲輪と第3曲輪の間に第6トレンチを設定し堀の土層観察を行った。堀は当初考えていたものよりかなり深くなり、第2曲輪の平坦面から約2.4 mとなった。堀は礫層まで掘られ、断面形もV字形をなす(第28図)。他の箇所を設定したいくつかのトレンチにおいても同様なことが認められた。

Ⅲ、ま と め

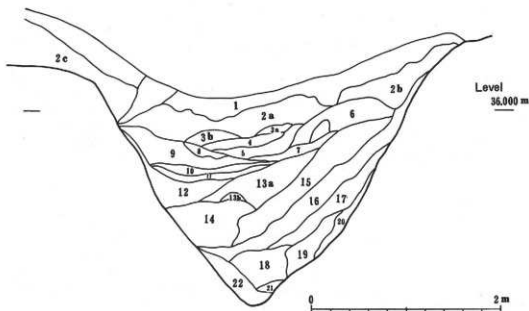
日向記など古い文献でもみられるように、この熊野の地は山東を支配しようとする島津氏、それに対し飢肥を得んとする伊東氏それぞれ進出しようとする場合の要所であったと思われる。幾度となく島津氏あるいは伊東氏の支配が繰り返され、記録にでなくても3回の入れ変わりがあったようで、両氏がまみえていわゆる「解放区」の様相を呈していたと考えられる。

表10 土師器観察表(2)

番号	出土 位置	器 形	法 量 (cm)			色 調		胎 土	焼 成	調 整			備 考
			口径	底径	器高	内面	外面			内 面	外 面	底 部	
1	第1曲輪	環	13.3	9.2	3.3	浅黄橙	浅黄橙	白・うす茶の細砂粒を含む	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	外面はヨコナデによる凹凸がはげしい
2	"	"	10.5	6.8	3.7	浅黄橙	浅黄橙	白・うす茶灰の細砂粒を含む	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	
3	"	"	-	7.5	-	浅黄橙	浅黄橙	灰・うす茶の細砂粒を含む	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	底部に板目が残る
4	"	"	12.6	8.5	3.6	浅黄橙	浅黄橙	細砂粒を含む	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	
5	"	"	-	7.2	-	淡橙	淡橙	うす茶・白・白く光る細砂粒を含む	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り	口縁部付近に一筋ススが附着している
6	"	皿	7.4	6.1	1.4	浅黄橙	浅黄橙	灰・茶の細砂粒を含む	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	
7	"	"	7.5	6.2	1.6	橙	橙	細砂粒を少量含む	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り	内外面に一筋ススが附着している
8	"	"	7.2	6.2	1.5	にぶい橙	にぶい橙	0.5 mm前後の砂粒を含む	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り	



第27图 第2曲輪出土遺物実測図(縮尺1/3)



- 1 層 暗褐色土層 (Hue10Y R X) 塊状層である。粒径がばげしい。
- 2a 層 暗褐色土層 (Hue10Y R X) 2a以上の層1-2コ。及び小塊を多少含む。比較的かたい層である。
- 2b 層 暗褐色土層 (Hue10Y R X) 2a層と同様であるが、一部塊状穴が入りこんでややゆるい部分がある。
- 3a 層 暗褐色土層 (Hue10Y R X) 塊状層である。強い粘性があり、かたくしまっている。上部小穴を少量含む。
- 3b 層 暗褐色土層 (Hue10Y R X) 層の性質、状態は2a層と同様であるが、層よりやや粘性がある。
- 4 層 暗褐色土層 (Hue10Y R X) 強い粘性のあるかたい層である。
- 5 層 暗褐色土層 (Hue10Y R X) 粘性が4層にくらべて増し、色もやや暗く暗褐色をおびてくる。かたい層である。
- 6 層 暗褐色土層 (Hue10Y R X) 小塊を少量含む。粘性がかりかたい層である。
- 7 層 暗褐色土層 (Hue10Y R X) 5層より色調がやや暗い。下部に黄色の砂を少量含む。
- 8 層 暗褐色土層 (Hue10Y R X) 3b層よりやや暗い色調である。粘性があって、中からかい部分とかない部分がある。
- 9 層 暗褐色土層 (Hue10Y R X) 砂質土が多少含まれりや中粒子があらくる。そのため表面的には粘性がよくなる。
- 10 層 暗褐色土層 (Hue10Y R X) 上部では層土とまじり暗褐色を呈するが、下部では黄色の色がよくなる。強い粘性がある。
- 11 層 オリーブ褐色砂層 (Hue2.5 Y R X) 黄色の砂と暗褐色の砂質土とがやや均等に混ざっているが、全体的には黄色の砂の方が強い。強い粘性がある。
- 12 層 暗褐色土層 (Hue10Y R X) ややもろい小塊を含む。粘性が強くかたくしまった層である。
- 13a 層 暗褐色土層 (Hue10Y R X) 小塊盛り。棕色のパリスを粒状にまぜらる。粘性がゆるい層である。
- 13b 層 暗褐色土層 (Hue10Y R X) 13a層と同様であるが、13a層には棕色のパリスが見られない。
- 14 層 暗褐色土層 (Hue10Y R X) 小塊一次粒が多く含む層である。比較的太きめの根は南向に集まり、横倒していて残りの部分に小塊が集中している。粘性あり。
- 15 層 暗褐色土層 (Hue10Y R X) 小塊一中粒盛り。棕色のパリスが13a層より細かくはいる。また、粘性も13a層より強い。灰を少量含んでいる。
- 16 層 暗褐色土層 (Hue10Y R X) 小塊盛り。棕色のパリスを粒状にまぜらる。粘性がゆるい。粘性のある比較的やわらかな層である。灰を少量含む。
- 17 層 暗褐色土層 (Hue10Y R X) 小塊盛り。14層より色調が暗い。同時にパリスを含む。灰や気を含んだ暗褐色の層である。
- 18 層 暗褐色土層 (Hue10Y R X) 小塊が多くなり、硬層とも見えるが、土の方がやや層結している。粘性がかりかたくしまっている。
- 19 層 暗褐色土層 (Hue10Y R X) 褐色の結實土を一部に少量含む。粘性がかりかたくしまった層である。パリスも少量含む。
- 20 層 暗褐色土層 (Hue10Y R X) パリスを少量含む。かたくて粘性がある。
- 21 層 暗褐色土層 (Hue10Y R X) パリス。灰を少量含む。粘性がよくなる。灰や気もつよい層である。
- 22 層 暗褐色土層 (Hue10Y R X) 中一水層の層に粘性のある比較的やわらかい暗褐色土が入りこんだ層である。灰や気もつよい。

第28図 第6 トレンチ南壁土層断面図 (縮尺 1/40)

出土遺物は、土師器の環・皿が主体でそのほとんどはへら切り底のものであり糸切り底は少ない。土師器は編年がまだ県内では確立されておらず時期は不明だが、環・皿の形態が前原西遺跡出土のものに類似することなどから14～15世紀のものと考えられよう。陶磁器類では備前焼、青磁、白磁が少量みられる程度であった。備前焼では、甕の口縁部の玉縁が下方にさほど垂れてきておらず、播鉢は口縁上面を外下り気味に面取りしている点などから第Ⅲ期の後半（南北朝～室町時代初頭）に位置付けできよう。青磁はその形態あるいは施釉の状態から15～16世紀代のものと考えられる。概略ではあるが、遺物では15～16世紀前半までのものが主でそれ以後の遺物はほとんど出土していない。

城の防御施設としては、曲輪の周囲に深さ2m程度の堀が巡らされている点や土塁が非常に大きいこと、そして土塁上の柵あるいは板柵の存在などからかなり堅固なものであったと想定される。城の北側が非常に堅固であり主郭が南端に位置することなどから当山城は北向きと考えられる。

また伊東氏の記録である「日向記」にも車坂城の記載はみられるのに対し、当山城についての記載がまったくみられないことなどから、山東へ勢力を拡げようとする島津氏の拠点として考えられる。そして、当山城は伊東氏の四十八城の一つにもなった清武城に対するものとして築かれたといえる。そうすると、遺物の示す年代と伊東義祐が既肥を支配する時期、天文十年（1541）とある程度一致することから、伊東氏の既肥進出に伴って、島津氏の城である今江城は廃城されたと考えられる。丘陵頂部にある深さ約2mの堀がすべて埋没していることなどはこれを示す例かもしれない。また、伊東氏没落後、島津氏が日向を治めるが、その折、宮崎城に入った上井覚兼の日記にも「海江田」（加江田）の記載はみられるが当山城に関する記載はないことからすでにこの時期（16世紀後半）には廃城になっていたと考えられる。

当山城の文献上での記録の探索は今後の課題となるが、島津氏の有力な家臣であった山田聖榮の記録において「……是も元久御代山東加江田倉そこノ城貴落之時合戦、新納殿内限江方討死……」とあり、「倉そこノ城」を当山城に比定できるかもしれない。

（谷口武範）

註

- (1) 『建久園田帳』日向郷土史料集刊行会 1963
- (2) 『前原西遺跡』『宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報』（Ⅱ）宮崎県教育委員会 1981。

- (3) 「堂地東遺跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告第2集』宮崎県教育委員会 1985
- (4) 『山内石塔群』宮崎県教育委員会 1984
- (5) 「城内遺跡」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』(3) 宮崎県教育委員会 1979
- (6) 「都城・中之城跡」『都城市文化財調査報告書第3集』都城市教育委員会 1983
- (7) (4)と同じ
- (8) (2)と同じ
- (9) 間壁忠彦「備前」『世界陶磁全集』(3) 小学館 1977
- 10 「上井覚兼日記」東京大学史料編纂所 1954
- 11 山田聖栄は応永五年(1393)に生まれ90年近く生存している。この山田聖栄自記は彼が85才の時(文明十四年)の年に数巻の書になったという。
『山田聖栄自記』鹿児島県 1967

参考文献

- 「日向記」『日向郷土史料集』第1巻所収 日向郷土史料刊行会 1951
- 平部嶺南『日向地誌』日向地誌刊行会 1929
- 喜田貞吉・日高重孝『日向国誌』史誌出版社 1930
- 日高次吉『宮崎県の歴史』山川出版社 1970

圖 版



今江城跡 (仮称) ・前原北遺跡

図版 2



S A 5・6 検出状況 (北西から)



S A 50 検出状況 (西から)

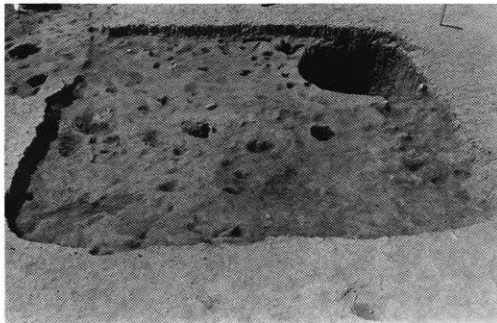


東端区の状態 (西から)



S A 10・S A 10-1 検出状況 (南東から)

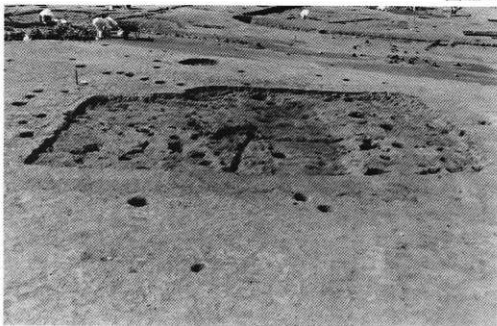
図版 4



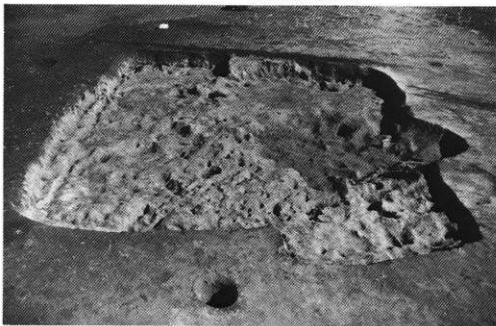
S A 10検出状況 (東から)



S A 22検出状況 (北から)



SA 4・SA 4-1 検出状況 (東から)



SA 36 検出状況

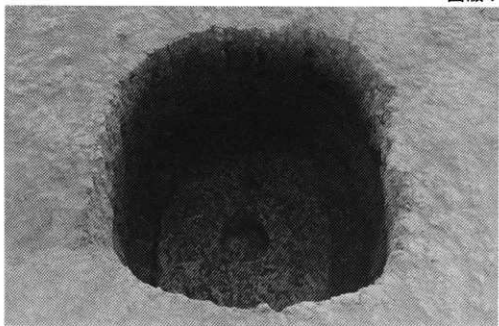
図版 6



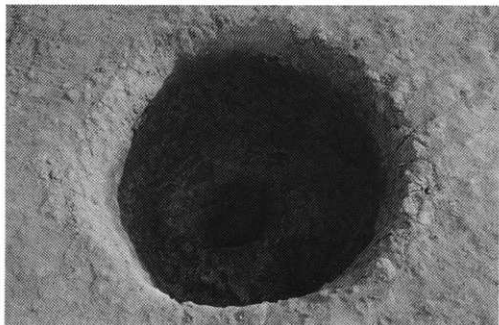
S A 49遺物出土状況



S A 49高坏出土状態

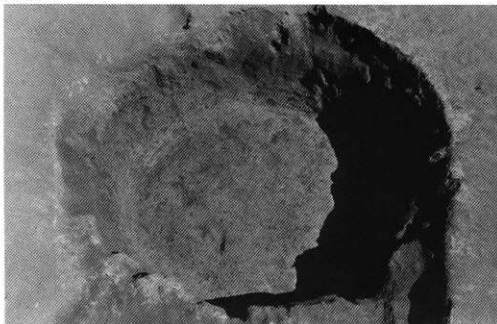


S C 12 検出状況

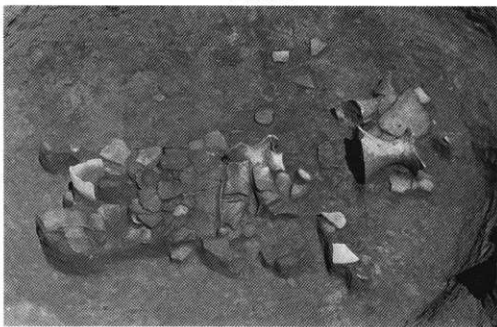


S C 16 検出状況

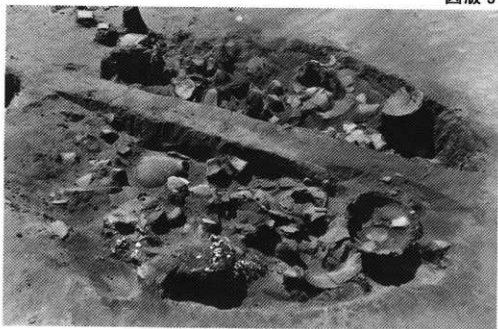
図版 8



S C 13検出状況



S C 13遺物出土状態



SA30-SC1 遺物出土状態

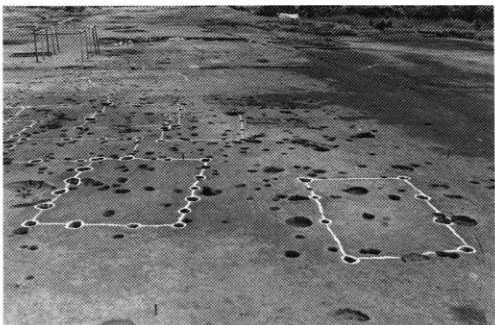


SA30-SC1 貝殻出土状態

图版10



西区掘立柱建物跡検出状況(1)



西区掘立柱建物跡検出状況(2)



SA 5



SA 5



SA 6



SA 6



SA 5



SA 10



SA 10



SA 10



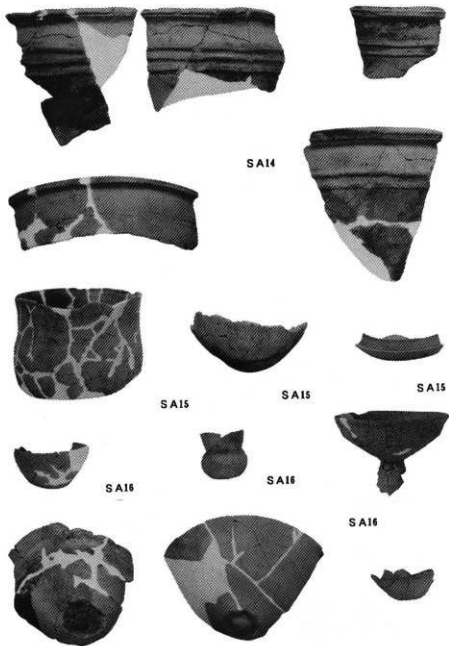
SA 10



SA 14



図版12



前原北遺跡出土遺物(2)



SA28



SA28



SA32



SA32



SA32

SA32



SC11



SC2



SC2



SC2



SC11



SC11



前原北遺跡出土遺物(3)

図版14



今江城（仮称）北から



今江城（仮称）遠景北西から



第1曲輪第3トレンチ東壁土層断面



井戸検出状況

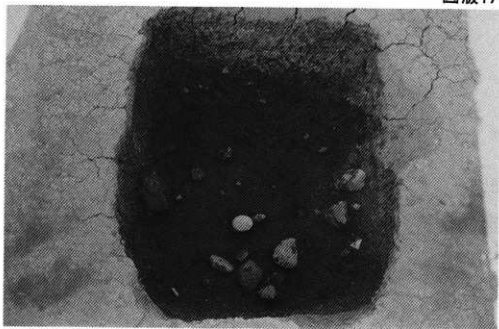
图版16



5号・6号土壙検出状況



7号土壙検出状況



9号土坑出土状况



9号土坑遺物出土状况